

ベトナム

ーリサイクルビジネスの中国人バイヤーたちー

坂田 正三

ベトナムでは、中国人といえば、「商売人」というイメージが強いようだ。多くのベトナム人は、日本人や韓国人をみると、ベトナムに進出している企業の経営者が従業員であろうと考えるのに対し、中国人といえば、アタッシューケースひとつでやって来た中国との輸出入を手がける個人経営の商売人

を思い浮かべるらしい。事実、ベトナム・中国間の貿易は盛んで、中国はベトナムにとって最大の貿易相手である一方、ベトナムに投資する中国企業のプレゼンスは驚くほど小さい。統計総局発行の『ベトナム統計年鑑』によれば、二〇一〇年までの累計で、中国からの直接投資は件数にして七七〇件、投資額は三七億ドル弱である。日本と比べると、投資件数（一四二五件）は約半分、投資額（二一〇億ドル）は一八%程度

と、投資総額も少なければひとつひとつの投資案件の規模も小さい。

●温州から来たシュウさん

ハノイの隣に位置するフンイエンの農村で筆者が出会ったシュウ（許）さんという壮年の中国人も、ベトナム人がイメージする典型的な中国人のひとりであった。その村は、テレビやパソコンなどの廃家電製品を解体している世帯が集中している村で、筆者がシュウさんに会ったのは、その村で最も早く家電解体ビジネスをはじめたヴィエトさんという旧知の方のお宅を訪ねた時であった。シュウさんは、廃家電から分別・回収されたプリント基板やチップなどをヴィエトさんから買い付け中国に輸出しており、ベトナムでこの商売を始めて八年経つという。ベト

ナム人の奥さんをもらい、子供もでき、いまではベトナムを拠点に活動している。奥さんはヴィエトさんの親類らしく、シュウさんはいつも買い付けに来るお得意さんというよりは、ヴィエトさんの共同経営者のような立場であった。シュウさんは温州出身。一五歳で海を渡り、世界中のあちこちで商売をやってきたという。日本にも知り合いがたくさんいるそうである。なぜそんなに若くして海外に出ようと思ったのか、と聞くと、「周りがみんなそうだから」という答えが返ってきた。温州人が世界中でビジネスネットワークを形成できるのは、そんなところにも秘密の一端があるのだろう。

シュウさんはベトナムで回収したプリント基板から金や銅などの金属類を抽出する工場を中国に持ち、ベトナム北部だけでなく、中

部や南部からもプリント基板やチップを回収し中国に輸出している。また、世界に広がる温州人ネットワークを利用して、廃電分分野だけでなく、革靴を製造してヨーロッパに輸出するビジネスもホーチミン市で始めたと言っていた。

●中国に向かうベトナムの廃棄物・スクラップ

シュウさんに限らず、ベトナムで廃棄物やリサイクルに関係した調査をしていると、あちらこちらで中国人と出会うことになる。ホーチミン市の中心部から少し離れた国道二二号線沿いには、廃家電から取り出したプリント基板やチップ類、廃棄されたCDやDVDを買い付ける中国人バイヤーが経営する倉庫が軒を連ねている。筆者は中国国境から五〇〇キロ近く離れた中部のゲアン省でも、廃ペットボトルを買い付けに来ていた中国人バイヤーに会ったことがある。フンイエンの廃バッテリーのリサイクル工場に調査に行った時には、同行した同僚の研究者が中国人バイヤー（そして筆者がその通訳）と間違えられ、工場の若い女性工員たちに「いっしょに中国に連れて行って」など



パソコンモニターは小船に乗せて中国に輸出されている（モンカイにて小島道一撮影）

と言い寄られていた。

中国とベトナムをまたぐリサイクルビジネスは、ベトナムで回収されたリサイクル可能な廃棄物・スクラップをマテリアルのまま、あるいは一次加工した状態で中国に輸出するというものである。たとえばペットボトルは圧縮・減容して、あるいは破砕して輸出される。廃バッテリーはそのまま輸出されるか鉛だけを抽出してインゴット状にして輸出される。家電製品は手解体され、プリント基板とチップ、プラスチックなどが中国に輸出される。そして、それらの一部は工業製品、たとえばペトボトルはぬいぐるみや枕の中綿として、廃バッテリーの鉛は新品のバッテリーの極板に塗布されてベトナムに戻ってくる。環境関係

のベトナム人識者らは貴重な資源としての廃棄物・スクラップの国外流出を嘆くが、そのようなりサイクル技術を持った企業がベトナムに育っていないのも事実である。

ベトナム人のリサイクル業者や中国人バイヤーたちの話によると、これらの廃棄物・スクラップのほとんどがモンカイ・東興国境という、比較的小さな国境ゲート経由で輸出されているようである。南部から輸出する場合も、直接中国には送らず、一旦モンカイで荷を降ろし、小船に積み替え、国境を流れる川を越えて東興まで運ぶのだという。

なぜそんな手の込んだことをするかといえば、それは、これらの品の多くが禁輸品だからである。中国では、有害廃棄物の越境移動を規制する国際的な取り決め「バーゼル条約」に準拠した廃棄物の輸入に関する厳格な国内法が存在している。この基準に照らせば、プリント基板やチップ、廃バッテリーの輸入はあきらかに違法、ペットボトルもかなりグレーである（排水処理設備がある工場で洗浄されていなければならない）。

世界の工場・中国は世界一の廃棄物・スクラップ輸入大国でもある

り、違法品も含め、ベトナム中の廃棄物・スクラップが中国に吸い込まれている。たくましい中国人バイヤーに押され、ベトナム人が中国への廃棄物・スクラップ輸出ビジネスに直接参入することは難しいようである。

●越中関係の悪化の思わぬ影響

とはいえ、違法あるいは違法の疑いのある廃棄物・スクラップの越境貿易ビジネスは、決して楽な商売ではない。密輸が摘発されるリスクは常に付きまとい、もしものための保険をかけるわけにもいかず、資源の国際価格も常に変動しているため、時には大きな損失も覚悟せねばならない。おまけに、彼らには国際情勢というリスクまで降りかかる。先述のシュウさんによれば、ベトナムと中国の間で何か外交問題が発生すると、どういふわけか国境での検問が厳しくなるのだという。

ベトナムと中国は、長い間お互いが南沙諸島、西沙諸島の領有権を主張しあってきたが、近年はその「主張」の仕方が少々過激になってきている。筆者がシュウさんに会ったのは二〇一一年の初頭であるが、その前年の二〇一〇年は、

両国間の緊張がそれまでになく高まった年であった。一月に中国政府が南沙諸島、西沙諸島における観光開発計画を発表したため、ベトナム政府が抗議声明を出し、九月には西沙諸島近海でベトナム漁船が中国当局に拿捕される事件が大きな話題となった。国境の検問が突然厳しくなると、何かまた両国間で問題があったのだなと察し、どうすることもできないのでモンカイの倉庫でしばらく荷を止めておくしかないのだ、とシュウさんは苦笑いしていた。

以来、シュウさんに会うことはかなわずにいるが、その後もベトナム・中国間の事件が報道されるたびに、彼の苦笑いを思い出す（二〇一一年五月には、ベトナムの石油探査船が中国当局の監視船に妨害され、それをきっかけに六月にはハノイの中国大使館前でデモが起きている）。おそらく、苦笑いしつつこの成り行きを見守っているのは、ベトナム人の間にも沢山いるはずである。マスコミや活動家と彼らとの温度差もまた、複雑な越中関係の一面である。

（さかた）しょうぞう／アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ